

## 阿武喜美子先生 —生化学と女子高等教育に捧げた生涯—

## Professor Kimiko Anno Who Devoted Her Life to Biochemistry and the Education of Women Scientists

上平初穂 Hatsuho UEDAIRA

阿武喜美子お茶の水女子大学名誉教授(1910-2009)は、日本の科学界で先駆的な役割を果たした偉大な女性の一人である。直に教えを受けるという幸運に恵まれた者の一人として、先生の探究心に溢れた生涯、業績について述べたい。

阿武先生は山口県の当時としては女性が科学を専攻することに理解のある家庭に生まれ、東京女子高等師範学校、続いて東京文理科大学を1937年に卒業された。さらに大学院に入って研鑽を積みたいとの阿武先生の希望は厚い壁に突き当たった。当時は女子に対して門戸を開いていた大学は、文理科大学、東北帝国大学などわずかの大学があったのみ。大学院生として受け入れるところを探すのは不可能に近いこと。天然物化学に興味があった阿武先生は東大の藪田貞次郎教授の研究室に熱心に通い、今で言えば研究生というような形で実験だけさせてもらえるようになった。ある日、「Tokyo Imperial University Calendar (1933-1934)」の13ページに、「The person who proved himself or herself to be equal of the gakushi can become a candidate for admission to the post-graduate course.」という文章が載っているのを藪田先生が発見した。日本語の東京帝国大学の規定には女子については触れていなかったが、この英文では女子も大学院に入学を希望できるはずと、結局、1938年4月から正式に大学院への入学が許可され、阿武先生は日本の女子大学院生の第1号になった。この、何事も諦めない先生の粘り強さには感嘆するばかりで、先生の熱心さと有能さは、担当の教授を動かし、ついに大学評議会をも動かすことになったと思われる。

阿武先生は大学院終了後すぐ母校の女高師に就任。女高師からお茶の水女子大学へと制度が変わる中で、1975年に退官するまで30余年にわたり、研究と教育に心血を注がれた。

先生は、1950年から3年間の米国オハイオ州立大学への研究留学中、糖の還元反応やキシロサミンの全

合成などを研究。1952年から理学部化学科生物化学講座を担当し、帰国後は、無脊椎動物や下等脊椎動物の結合組織のムコ多糖に関する研究から多くの新しいコンドロイチンポリ硫酸やキチン硫酸を発見した。これらの化学構造決定の業績は国際的に高く評価されて

いる。また、加齢やがん化とムコ多糖の変化との関係にも早くから着目し、生物学、医学、薬学の分野に重要な糖質科学の基礎を築いた。

学会では、日本結合組織学会理事や会頭、日本糖質学会の前身である炭水化物研究会、日本生物学会、農芸化学会などの評議委員など幅広く活躍。日本婦人科学者の会(現在の日本女性科学者の会)の初代会長として10年間、女性科学者の交流と地位向上に努めた。

教育分野では女子教育に加え、とくにお茶の水女子大学における大学院の設置や、女性が科学者として進む道を広げるために尽力された功績は大きい。先生の熱意は溢れるばかりで、学生に対する厳しい指導の蔭には優しさや、学生たちの自覚を促す強い気持ちがあった。教え子たちは卒業後も適切な助言と励ましで後押しを受け、元気を取り戻し仕事を続けることができた。現在、大学院に進む女子学生が増えている。独身で頑張りしかなかった厳しい時代の先駆者たちの熱意とその生涯が、種々の障害をのり越えて子育てをしながら研究を続けようとする女性研究者たちに道を開き、勇気とやる気を与えてくれていると思う。



上平初穂 Hatsuho UEDAIRA

筑波物質情報研究所  
工学博士。  
専門は生物物理。